

2011 年度第 2 回シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金 成果報告書
「地域の学びプラットフォームアーキテクチャー」育成モデル構築のアクションリサーチ
政策・メディア研究科博士課程 3 年 西田みづ恵

1・概要と背景

本研究は、「地域の学びプラットフォームアーキテクチャー」を育成する効果的なモデルの構築を目指すアクションリサーチである。プラットフォームとは、「多様な主体が協働する際に、協働を促進するコミュニケーションの基盤となる道具や仕組み」（國領、2011）である。本研究における「地域の学びプラットフォーム」とは、その中でも学びを促進するコミュニケーションの基盤となる道具や仕組みのことを指し、それを地域の中で設計できる人を「地域の学びプラットフォームアーキテクチャー」と呼ぶ。

昨今、地域づくりにおいて人材育成が重視されている。しかし、企業のように、命令が機能しないことや、権限や給与などのインセンティブが働かないことから、主体的参加と相互作用により地域の人材を育成することが求められている。そのための手法として、研究者は、2005 年から、「地域ディスカッションリーダー」を育成するための研修会を開いている。「地域ディスカッションリーダー」とは、地域の課題が書かれている事例教材を用い、自分がその中の主人公だったらどのように解決していくのか、参加者に考えてもらい、議論をリードする人である。この手法を学ぶためには、徒弟制度のように実践を交えながら学ぶものであるため、これまで研究者が各地へ赴いて大学生を対象に研修会を開いてきた。しかしながら、実践してみた経験知を知ること大切であり、一地域の中では限界があった。そこで、本研究は、地域間交流を起こすことが、「地域の学びプラットフォームアーキテクチャー」を育てることを促すという仮説のもと進める。

近年、一つの地域で始まり、10 年以上継続してきた地域づくりの非営利組織が、各地域へ飛び火するように広がっている（例えば、佐賀市の「鳳雛塾」や兵庫県の「ひよこむ」、富山市の「インターネット市民塾」などである）。また、それらがサミットなどを通して地域を超えた交流や連携を始めている（例えば、市民塾サミットや B-1 グランプリなどである）。申請者の予備調査から、アクターが地域を超えて繋がることで、各地域で抱えている課題や解決策を共有したり、災害時に地域同士で協力したり、限られた資源を、地域を超えて交換・共有する効果があると考えられる。

予備調査として、2011 年 7 月に、自分の地域の若者に対して地域ディスカッションリードを行っている神奈川県藤沢市の大学生と高知県高知市の大学生が、地域を超えて集まる 2 泊 3 日の研修会を開催した。その結果、ノウハウの共有と交換が起こった。しかしながら、それが地域間交流の中のどの要素に因るものなのかは課題として残った。特に、二者間だったこと、また、両方とも従来から研究者との関係があったことなどの要因が考えられた。そこで、本研究では、研究者と関係を持っていない新たな参加地域を増やすことで、地域間交流が「地域の学びプラットフォームアーキテクチャー」（地域ディスカッションリーダー）の育成を促すのかどうか、その中でどの要素が作用しているのかを探索するアクションリサーチを行う。

2. 研究内容

「自分の地域資源を活用して、地域の子供たちに学びの場を作る大学生と教員」である 3 地域の大学生が参加する研修会と実施し、参加者にアンケート調査を行った。さらに、この回に参加できなかった高知のメンバーに対しても、今後のためにキャッチアップの研修会を開いた。

① 3 地域の地域間交流研修会

- ・活動名称：第 2 回結塾ネットワーク
- ・開催日：2012 年 2 月 21 日、22 日、23 日
- ・開催場所：かながわ女性センター、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス

- ・参加者：研究者、「VITA+」9名（慶應義塾大学学部生）、「土佐姫塾」3名（高知県立大学学部生）、「Koeki Kids」5名（東北公益文科大学学部生・教員）
- ・内容：

日付	内容	詳細
2月21日	おもてなしフィールドワーク1	藤沢の大学生が、江ノ島を他地域の大学生に案内する。
	活動紹介	各々の活動内容、方法と成果、課題について、プレゼンテーション
	地域ディスカッション1	ケース教材「米子南高等学校」を用いたディスカッション
	各地域の紹介	「VITA+」から藤沢市の紹介、「土佐姫塾」から高知県の紹介、「Koeki Kids」から山形県の紹介
2月22日	デザイン講座	デザインを通じた地域づくり活動の方法について学ぶ
	地域ディスカッション2	ケース教材「米子南高等学校」を用いたディスカッション
	ミニ地域ケース教材作成	各自、短い地域ケース教材を作成
	地域ディスカッションリーダー体験	各自で準備した短い地域ケース教材を使って、ディスカッションリードを体験
	懇親会	藤沢市のメンバーが愛用しているお店にて開催。
2月23日	おもてなしフィールドワーク2	藤沢の大学生が、鎌倉を他地域の大学生に案内する。

② 高知のみのキャッチアップ研修会

- ・活動名称：第2回結塾ネットワーク高知キャッチアップ版
- ・開催日：2012年3月7日、8日
- ・開催場所：高知県立大学
- ・参加者：研究者、「土佐姫塾」8名（高知県立大学学部生）
- ・内容：

日付	内容	詳細
3月7日	第2回結塾ネットワークの紹介	2月の第2回結塾ネットワーク開催時の様子を伝える。
	地域ディスカッションリード相談会	普段、実践している地域ディスカッションの疑問などについて相談に乗り、全員で考える。
	ミニ地域ケース教材作成	各自、短い地域ケース教材を作成
	地域ディスカッションリーダー体験	各自で準備した短い地域ケース教材を使って、ディスカッションリードを体験
	懇親会	高知市メンバーおすすめの地元のお店にて感想を共有。
3月8日	ケース教材執筆相談会	ケース教材執筆に関する疑問について相談に乗る。

3. 結果・考察

結果、ノウハウの共有と交換が予備調査の時よりも多く見られた。具体的には、上記のプログラム以外で、地域ディスカッションリードについて意見交換を自発的に行ったり、自分の地域に戻ってからも、研修会で他地域から学んだことを応用するための動きが起こったりした。つまり、3地域でも可能であり、また研究者との従来の関係性は直接的な要因ではないと思われる。代わりに、上記のような行動は、予備調査と本研究の両方に参加したメンバーから起こったことであり、参加者が同じ研修会に参加したことがあるかどうか、地域間交流に大きな要因であると考えられる。また、今回は、「自分の地域資源を活用して、地域の子供たちに学びの場を作る大学生」という共通点を設定したことで、参加者全員が仲間であるという意識を持ったことがわかった。これらは、どれも、金井(1994)の「多様性—同質性ジレンマ」（同質性がないと集まらないが、多様性がないと新たな展開は生まれぬ）で指摘されていることであるが、地域間交流においても、同質性をどのように設定するのかが、地域ディスカッションリードのスキルを共有し、各地のオリジナリティを学び取るために重要な鍵になると考えられる。本研究では、その要素の一部を導出することができたが、今後、更なる理論研究と実践から分析を重ねていくことで、地域間交流による人材育成モデルを構築していきたい。

4. 参考文献

- ・飯盛義徳(2007a)「地域情報化プロジェクトにおける協働メカニズムの探究」慶應義塾大学博士論文。
- ・飯盛義徳(2007b)第3章「広がる、広げる」國領二郎、飯盛義徳編『「元気村」はこう創る』日本経済出版社。
- ・金井嘉宏(1994)『企業者ネットワークの世界』白桃書房。
- ・國領二郎、プラットフォームデザイン・ラボ(2011)『創発経営のプラットフォーム』日本経済新聞出版社。